

ふらっとぽく

見る、触れる、話す、感じる、考える

展覧会の仕掛人

岐阜県美術館学芸員

西田 創 氏

Nishida Hajime

独占インタビュー

「かつてない展覧会」のナゾに迫る！

9月5日(金)～10月5日(日)のわずか1ヶ月間、岐阜県美術館で開催される「ふらっとぽく 見る、触れる、話す、感じる、考える」という展覧会(以下、「ふらっとぽく」)。我々岐阜県美術館アートコミュニケーター「～ながラー」の元には、これまでにない実験的な展覧会であるとの情報が入っていた。しかし、その詳細については謎が多く実態が把握できていなかった。そこで、展覧会の仕掛人である西田創氏に独占インタビューを試み、西田氏とは何者か、「ふらっとぽく」とは何なのか、数多くの謎に迫った。

若き担当者 学芸員 西田創さん

■ご自身のプロフィールについてお尋ねします。

大学院終了後、岐阜県美術館に採用され今年3年目です。大学院では美術史を専修し、主に19世紀のフランス美術でエルネスト・メソニエという、いわゆるアカデミズムの画家の研究をしていました。印象派とは対照的な立場にあるのがアカデミズムとも言われています。作品が当時の最高クラスの価格で取引されるなど高い評価を受けていましたが、なぜそのような高評価を受けることになったのか、時代背景などの研究をしていました。

■学芸員を目指したきっかけはなんですか。

両親が美大出身ということもあり、小さい頃から美術館を家族で訪れていました。反抗期に美術館から離れ、吹奏楽に熱中していた時期もありましたが、久しぶりに美術館を訪れたところ、やっぱり美術が好きだと実感しました。その後、中学を卒業した頃には、美術に関わる仕事をしたいと思うようになりました。吹奏楽をやりたいので、進路指導で美術史をやりたいから文学部に行きたいと言ったら高校の担任に「えっ！お前、音楽方面に進むんじゃないのか？」と言われたくらいでした。絵は趣味程度に描いていたくらいでしたし、誰々の絵に感銘を受けて学芸員を志したということではありません。絵を見ることで感動する自分、楽しいと思う自分がいて、そこが原動力にはなっている一方で、なぜこの時代に評価されているのか？と客観視する自分もいて、それが学芸員を志した要因になっていると思います。

西田学芸員を囲んでのインタビュー風景

インタビューは約2時間。最初は少しはにかんでおられましたが、話し始めると大阪魂が炸裂。「双子の弟さんネタ」などオモロイ話もたくさん聞かせていただきました。誌面の都合で笑える部分はカットしていますが(ごめんなさい！)記事から西田さんのお人柄が伝われば嬉しいです。

■学芸員の主なお仕事について教えてください。

学芸員といえば、展覧会を作ることが主な仕事とされているかと思いますが、それ以外に作品収集、調査研究、保存・修復など多岐に渡ります。もちろん、岐阜の地域の美術を伝え、郷土の作家を顕彰することも大切な仕事です。今回初めて「ふらっとぽく」展を担当することになり、展示を作り込みながら、もがき苦しみつつ勉強をしているところです(笑)。

■休日はどう過ごされていますか？

休日はたいてい美術館巡りをしていて、東京、大阪では3館以上ハシゴする事もあります。建築にも関心があるので、建築家がドーンと作った美術館も好きですね。安藤忠雄さんの兵庫県立美術館は展示室の天井が高いので作品が見栄えしますよ。学生時代は吹奏楽部でファゴットという楽器に打ち込んでいましたが、余裕がないので今は吹いてないですね。ただ、全然違うスイッチがないと息が詰まることがあるので、自分に合う趣味は常々探しています。

